研究ノート　ニダバ (*Nidaba*) 40(2011), 119-128

良い句構造文法に資する若干の補遺問題

―名詞句述語構文や進行形構文の諸問題―

田原　薫

0．はじめに

前回、『ニダバ』３９号で、２０世紀の終末まで持ちこたえられず衰退してしまった句構造文法、とりわけ変形生成文法に取って替わる「良い句構造文法」がもし可能であるとしたら、それはどんな条件を具えていなければならないか、を大まかに考察した。今回は（たぶんこれがこういった論稿の最後になると思われるので）変形生成文法であまりはっきりした説明が付けられなかった名詞句述語構文などの扱いをどうすべきか、考察してみようと思う。もちろん言語によっては名詞句だけで充分な叙述力をもって活動している言語もあるが、我々になじみ深いＳＡＥ（標準平均欧州語）では通例叙述の断定役として助動詞的な繋辞（コピュラ、copula）を使い、いわばそれに必須補充成分のような形で客辞・属辞とか補語（英文法での言い方、complement）とかの名のもとに名詞句を導入するのが一般的になっている。その際、各国語の文法（文典）の模範とされたラテン語では、文主語が「主格」を帯びるのは当然として、それとイコールの関係で叙述を担う客辞の方も主格を帯びていたので「模範言語の文典に倣え」とばかりに、叙述にあたる名詞句も「主格」をもっているのが当然として受け入れられてきた。しかし、その格がほんとに主語と同じ自律的な主格であるのか、一致（agreement)という要求に応えて受動的・他律的に取った主格であるのか、は大いに議論する余地があるし、たとえば英語の It's me.やフランス語の C'est moi. のような代名詞客辞文では、格形的に客辞が明らかに主語の格と異なっているから、それらの格をどう解釈するのかも問題となる。

上例のような場合、私は（ちょっと矛盾した言い方だが）「直斜格」という概念を導入した方がよい、と思うが、人によっては「絶対格」という言い方の方がよい、と言うかもしれない。もちろん能格言語における、相対的に動作主を表わす能格と対立する格である「絶対格」とは別ものであり、一部の学者が紛らわしい用語として排斥するかもしれないが、要するに論文の冒頭で明確に定義して使えば何も問題はない。

以上で示唆したように、名詞句述語構文の述語名詞句の格を、真の「主格」と考えず、独自の斜格と見なすことは、ＳＡＥの中で独自の進行アスペクトまたは一時的アスペクトをもつ諸言語のいわゆる「進行形」の解釈にも波及する、射程の長いものである。

1．一致の規則によって他律的に取った主格の問題

たとえばラテン語で、「ユリウス（というの）はカエサル（のこと）である」という意味を最も簡潔に表現するのに(1) のように言ったとしよう。

(1) Julius Caesar est.

ラテン語では語順の自由度が大きく、コミュニケーションを損なわない限りどんな語順も許されると言われているが、いわゆる verb final の文が最も格調が高いとされる。今の表現はそれに従っているわけだが、それでは「カエサルはユリウスである」とも、「それはユリウス・カエサルである」（主語省略文）とも、「ユリウス・カエサルは存在する」とも解釈される可能性があるので、格調の高い文章を書くためならともかく、実用的な会話の文ではかなり古くから主語－繋辞－述語名詞句の語順がかなり固定していた、と私は考える。そうでないとラテン語から発達した現代ロマンス諸語の、Jules est César. とか、Giulio è Cesare. といった文は存立していなかったであろう。

ところで例文(2) のように否定の要素が文に入ってくると、否定の焦点が何であるか、が大きな問題となる。同定文の主語という要素は否定されないもの、と一応定義できるが、述語の方は否定されることができるもの、と考えられる。そこで、

(2) Julius Caesar non est.

この文は「ユリウスとはカエサルのことではない」とも「カエサルとはユリウスのことではない」とも解釈され、主題化や否定の焦点が曖昧になってくるのである。こうして見ると、主語のもつ主格に合わせて客辞の方も受動的・他律的に主格にする、という規範は（もちろん自由すぎる語順も併せて）通達機能上決して最善・最上の手段ではない、ことが明らかになる。本城二郎氏が本誌でたびたび論及しておられるように、いくつかのスラブ語では否定の焦点を「否定生格」（属格をこの学域では概ね「生格」と呼ぶ）で表わす、という興味深い現象があるが、それをラテン語に応用しようとしても不可能である。

(3) Julius Caesaris non est.　　(4) Caesar Julii non est.

(3),(4) で挙げた文に何かの意味があるとすれば、「ユリウスはカエサルのものではない」「カエサルはユリウスのものではない」ということであり、同定の否定にはならない。つまりラテン語ではスラブ諸語のように属格を使う手段によって否定の焦点を表わすことができないのである。しかしラテン語の娘言語であるフランス語には一見「否定生格」を暗示するような、部分冠詞という現象がある。しかし同一視してはならない。

(5) J'ai de l'argent.　　(6) Je n'ai pas d'argent.

いずれも前置詞 de を取り込んだ表現であり、(5) は「私は若干のお金をもっている」(6) は「…まったくお金をもっていない」という意味であるが、構文はいわゆるHABERE構文であり、「お金」は他動詞 avoirの目的語であって、ESSEの客辞ではない。

要するにラテン語まで遡れば、主語を同定する客辞としては他律的な主格を帯びるしかないわけであるが、一方では不思議なロマンス諸語での進行形の問題が提起される。

2．主語を同定叙述する具格（従格）の存在

具格はスラブ語学の学域では「造格」と呼ばれることが多いが、恐らく「何々で……を造る」という場合の「何々で」つまり素材を表わすのが最も典型的だったからであろう。ラテン語では男性（主格-us）、中性（主・対格-um）の形のいわゆる-o語幹の語彙の単数具格の語尾は -o である。この具格の語尾が格変化を失った現代スペイン語の-o語幹男性名詞（中性名詞は概ね男性化した）に持ち越された、というのが最も無理のない可能性の高い推理だと思われる。「いや、そうではない。主格-us だって、対格の-um だって弱化すれば語末の子音は脱落するから、使用頻度の高い主格や対格から来た、と考えた方が自然ではないか」というのは尤もな疑問であって、それを明確に否定することは私にはできない。ただ今言えるのは、主格-is （ただしn-語幹では単数主格で-oとなる語が多い）などに終わるいわゆる第３変化の名詞から来たスペイン語の現在の語形を見れば、やはり具格に軍配を挙げざるを得ないのである。それはたとえばこういうことである。

スペイン語で「人」あるいは「男性」というのは hombre であるが、これがラテン語の homine (homo の具格形)から来ていることは、一目瞭然でなくとも納得できるであろう。つまりhomine→homne→homre→hombre（語頭のｈは次第に発音されなくなった）という過程を辿ったのである。「いや、それならhominem (homo の対格形) だって hombre になることができるよ」という抗議の声が聞こえて来そうであるが、それなら nombre の話を出してみよう。 nombre とは「名前」のことで中性名詞 'nomen' から来ている。

中性名詞は主・対格同形であるから、対格nomenからはせいぜい nomeぐらいにしかなり得ないが、具格の形は nomine だからそれを基にすると nomine→nomne→nomre→nombre という風に hombre と同じ過程を通って産出されたことが無理なく説明できる。

【因みに、 hombre と同じ過程を通って来たと納得される語に hembra というのがあり、概ね動物の雌を表わすが、あまり敬意を必要としない場合は人間の「女」を指す場合もある。これはラテン語の femina から来ていて、やはりfeminā→femna→hemra→hembraという変化を経たことが想定される。なお、語頭のｆ音の衰退はスペイン語独自の特徴で、例えば周辺のロマンス諸語の「する／作る／させる」が faire, fare, fazer ＜ facere であるのに対してスペイン語では hacer (h-は無音）である。】

要するに、格調高い古典ラテン語がローマ帝国領各地の俗ラテン語に取って替わられ、それらが現代の各地・各国のロマンス諸語となるまでには、（少なくともヒスパニアでは）主格と対格が（前置詞などと共起しない）直格だから最も使用頻度が高かった、などとは決して断定できない状況にあった、と言ってよいであろう。

今までは単数の名詞のことだけ考えたが、複数の名詞では具格は-ibus などの形になることが多いので、これが現代ロマンス諸語の共通格の形として生き残っていないのは言うまでもない。複数で-s語尾を取る諸語では男性名詞（中性名詞起源のものを含む）・女性名詞ともに複数対格の形（-ōs, -ās, -ēs で終わる）が共通格になり、対照的にイタリア

語では複数主格の形が共通格になったと考えて事実とよく整合している。

以上見てきたように（一般論としてどの言語でも）主格と対格が最も使用頻度が高かった、というのは単なる思い込みであって、むしろ主格は代名詞に置換されたり、（話題の継続によって）省略されたり（つまり音声化されなかったり）することが多いので、主格単独の使用頻度は想像するよりも低かったと私は推定する。後代に男性名詞の類に統合された中性名詞の対格形は主格形と同じであったが、先程の nomine で見たように具格形はスペイン語の共通格 nombre を予兆し準備するものであった。男性名詞や女性名詞の対格形 hominem や feminam は大まかに言って具格形に-m（真の子音でなく恐らく軽い鼻母音化）を添えたものにすぎない。-o語幹ではたとえば Juliō に対して Julium となる。

こんな鼻音要素は時代によって容易に消滅するから、その結果として、対格は具格と同形になる。だから「主格と対格を合併した使用頻度」などを仮定する学者先生の論理展開は根本的に誤りであり、比較するなら主格単独の頻度と、「対格・具格連合体」の頻度とを比較して論じるべきだ、という正しい方法論が明らかになるが、いささか軽率な（つまり緻密なテクストやコーパスの統計調査によらない）私の直感では「…連合体」の使用頻度が主格単独の使用頻度を上回ったからこそ現代スペイン語が存在する、と言える。

さて、「また飛躍した直感の話か」と軽蔑されるかもしれないが、私は主格の主語に対応する述語名詞句つまり客辞として、少なくとも単数では具格あるいは先程の「連合体」が俗ラテン語では広く使われたのではないか、と推測している。つまり

(7) Julius est meo domino.（ユリウス様は私のご主人です）

(8) Julio est meus dominus.（ユリウス様が私のご主人です）

(9) Julio es meo domino.（ジュリオは／ジュリオが私の主人（家長・親分）です）

(10)Julio es mi dueño. （フリオは私の主人（家長・親分）です）

(7)(8)はもしラテン語の後期にあっても語順つまり主語の位置が自由であったとすると、叙述の提起成分＝旧情報と解答成分＝新情報との区別が、前者が主格、後者が具格の形を取ることによって示された、という仮説のもとに推定（復元？）してみた文である。

(9) は主格の標識である -s が全体的に弱化して脱落した段階を示したものであるが、こうなると旧情報と新情報の差は、主語が客辞に先行することによってのみ示されることになる。もうこうなるとスペイン語の文(10)と実質的に同じである。【domino は homine などと共通の音的配列(-min-の中間の弱い i がやがて消滅する）をもっているが、こちらは dombro にはならず、duomno→duemno→duenno→dueño となった。なお、これが非常に弱化した形が男性の個人名の前に付く don である】

以上述べた、少なくとも或る場合には客辞が具格の形を取った、という仮説はフランス語の C'est moi. や C'est toi. という文の客辞がなぜ je や tu でないか、をよく説明してくれる。つまり一人称 ego の具格は mē、二人称 tu のは tē だったので、Ecce-hoc est mē/tē.（といった俗ラテン語の形）からフランス語の形になったのである。

3．南欧ロマンス諸語の進行形と具格との関係

この節で述べようとすることはまず南欧ロマンス諸語（イタリア語、スペイン語、ポルトガル語を指す）で、英語の「進行形」‘be+V ing’で形式化される継続中の動作や状況を表わす表現が、文法用具化されて一種のコピュラとなった STARE（立っている）に添えて、現在形語幹から作られた -ndo に終わる動詞形で作られることである。この動詞形はスペイン語やポルトガル語の文法用語では 'gerundio' と呼ばれていて、ラテン語文法用語 'gerundium' を踏襲しているが、これの日本語訳は概ね「現在分詞」となっている。しかし「分詞」participle, participium というのは形容詞と動詞の性質を分有しているからそう呼ばれるのであって、明らかに動詞由来の形容詞である-ans/-ens 【いずれもt-語幹であって、活用に際しては-ant-/-ent- の形になる。たとえば、homo sapiens「知性のある人」の具格は homine sapiente であり、対格は hominem sapientem である】のような形容詞こそ「○○分詞」と呼ぶにふさわしいが、「現在…」という言い方はふさわしくない。なぜなら、それら形容詞は現在（目下）継続中や実現中の状況をも勿論表現できるが、大体は時に関係のない恒常的性質を表わす方がむしろ一般的だからである。だから私はこれを「未完了（汎時称）分詞」と呼ぶのがいいと思っている。

逆に、一時的に或る時間だけ継続中の状況を強く表わす-ando, -endo, -iendoに終わる動詞派生形はattributive な形容詞として使うことができず、叙述的に使うことしかできないから、スラブ語学の慣例を応用して「副動詞」と呼んでもいいだろうが、実体は動詞から派生された動名詞＝中性名詞（-o語幹）の具格形なのである。

さて、南欧の STARE＋gerundium の形の「進行中・継続中」アスペクト表現形式に話を戻し、まず一つのエピソードから始めよう。もう45年ほど前の話になるが、'La novia' という歌が流行ったことがある。スペイン語で「花嫁」という意味であり、原曲はスペイン語の歌詞が付けられていた、ということだが、なぜか日本では原曲の歌詞で歌われるのを聞くことがなかった。私と同年代（昭和一桁生まれ）の歌手でペギー葉山というのが勿論日本語訳で歌って、45回転のいわゆる「ドーナツ盤」（懐かしいね、若い人にはわかるかな？）に入って発売されていたが、中間部に突如外国語の歌詞で歌う部分が混じっていて解説にはその歌詞が印刷してあった。どうもそれはポルトガル語だったらしい。その中に 'Aos pés do altar <u>está chorando.</u> Todos dirão que é de alegria.' という部分があり「祭壇の下で（彼女は）<u>泣いている</u>。みんながそれは喜びのせいだ、と言うだろう」というように解される。ここで está chorando はラテン語の stat plorandō に対応する。この歌が気に入ったので、別の歌手が別の歌詞で歌った別のドーナツ盤も買ってみたが、それは Tony Dalalàというイタリア人の男性歌手が歌ったもので、上記の同じ部分の歌詞は 'Lassù l'altar lei <u>sta piangendo.</u> Tutti diranno che è di gioia.' であったと記憶している。ここでも「泣いている」の部分はラテン語の stat plangendō に対応している。

同じ歌の中でもう１箇所「進行形」が出現する箇所があり、次のような歌詞である：

ポルトガル語では 'Dentro sua alma está gritando, "Ave Maria."'「内奥では彼女の魂がAve Maria と叫んでいる」ということだろうし、イタリア語では 'Mentre il suo cuore sta gridando, "Ave Maria."'「彼女のハートがAve Maria と叫んでいるのに」(While her heart is crying……)ということだろう、とあまり両言語に詳しくない私は想像するが、もし違っていれば叱責・訂正して頂けたら幸いである。

【余談だが、この歌の歌詞は、花嫁の真の恋人でありながら別人との彼女の結婚によって振られた男の立場から書かれている。男性の Tony ならその男になりきって全体を歌えるが、女性のペギー葉山が歌うとどうしても花嫁のconfidanteな女友達という関係に聞こえてしまい、ポルトガル語バージョンにしても全歌詞は歌いきれなかったようだ。】

ところで、上記の STARE+gerundium 具格形の「進行形」は案外使用頻度／出現頻度が低く、もともと英語以外のＳＡＥでは単純な現在形が発話時現在の進行中／継続中の動作や状況を表わすことができるし、ロマンス諸語には過去の一種類に半過去／未完了過去というのがあって、問題の過去時に進行中や一時的継続中の状況を表わすことができるから、上記の「進行形」の出現頻度が英語などより低いのは頷ける。この歌のポルトガル語バージョンの出だしの歌詞は 'Branca e radiante vai a novia,' となっているし、イタリア語バージョンでは 'Bianca e splendente va la novia,' であって、「白くて、輝いていて（つまりそういう花嫁衣裳を着て）花嫁は（今）歩いて行く」という、現在進行中の状況を、単純な現在時制の動詞（vai/ va)で表現している。【歌詞の冒頭に並んだ、形容詞による「客員主格叙述語」も面白い問題を提供するが、今は動詞に集中してほしい】

単純な現在時制でも進行中の状況を表わすことができるのに、STARE+gerundio をわざわざ使った理由は、おそらく意味論的要因であると考えられる。勿論表現をよりvivid にしたいという欲求から来たのであろうが、さらに言えばその欲求は、事態が常識的に期待される流れに反して、聞き手に「なぜだろう」と興味をもたせるため、と推測される。

想像してみよう。本来なら喜びに満ちあふれていそうな花嫁が泣いている、というのは尋常でない事態である。本来なら花婿に寄り添っているべき花嫁が一人祭壇の前におそらく（STARE の本来の意味に反して！）跪いて祈っている、というのも非常識である。常識に従って淡々と起こる事態なら現在形ですまされるが、そうでなければより強い描出力をもつ表現が必要だ。今の場合の「進行形」はそれに応える表現だと思われる。

それにはラテン語がロマンス諸語になってから文法用具化（grammaticalize）されて一種のコピュラとなったSTARE の意味論的dynamismも貢献している。その原義は「立っている」ことであるが、「ある」と違って、人間は常に立っているわけではなく、座っている時もあるし、仰臥して眠ることもある。だから「立っている」のmetaphorとして「一時的に一定の時間だけ或る状態を保っている」という意味をSTARE は派生したのである。そして、それと組む具格（奪格／経過的状況格／時格も兼ねる）の動名詞の方もconstantでない状況を表わすのに適任であった。両者のカップルが「進行形」に結実したのである。

４．英語の進行形の場合

英語「…しつつある」という意味に使われる「進行形」は、よく知られているようにコピュラを助動詞として「-ing形」の動詞と組み合わせて表現するのであるが、この動詞形は「現在分詞」と呼ばれている。たしかに 'a running dog' のようにattributive に使うことができるから形容詞の特質を具えていて、その点では「分詞」という名にも仕分けにも違和感はないのであるが、ＳＡＥの中で最も（原形から）崩れた言語である英語には、例えば hunting dog（狩猟用の犬）のように名詞を並列して前者が後者を修飾する語法があるし、３個の単語を結合した seeing-eye dog （盲導犬）というのさえある。これらは意味がわかってから初めて分析が可能になる語法であって、分析が意味理解に先行することはできない。だから私は、極論すれば現代英語には「現在分詞」の名に値するものはない、と思っている。「-ing形」は実は動詞から派生した抽象名詞なのであり、本来はその起源からしてドイツ語の -ung で終わる抽象名詞と同じものである。

それでもドイツ語の -ung 型名詞は対格の目的語を取ることができないが、英語の-ing型は対格目的語を取る（たとえば writing letters）ことができるから、やっぱり-ing形は動詞だ、と抗議されるかもしれないが、それは、後で述べるように句構造上の違いに帰して説明ができる。今まで田原流のＳＯＯＴｈになじんで頂いたお方には、目的語候補が対格を帯びた目的語になるためにはＶＰの上に AGoという抽象的形容詞が掛からなければならない、ということをご存じの筈なので、結果はその有無の問題、つまりドイツ語では動詞がまだ対格を付与することができない裸のＶＰの段階でnominalizer＝-ung が結合して名詞化されたので、目的語候補は属格などの形でしか表現手段を封じられてしまったが、英語では一段階上の句すなわち AGoP（だから必要なら対格目的語を実現している）の上にnominalizer＝-ing が掛かるので、その段階で対格目的語をもったＮＰになり、さらにその上にその名詞句を具格に変えるような何らかの要素／力が働いて、それが助動詞 be と結託していわゆる「進行形」が成立した、と考えられる。

図１　ドイツ語 -ung の場合（Nmlz は名詞化子=nominalizer を表わす）

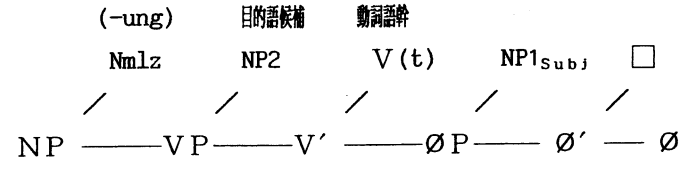
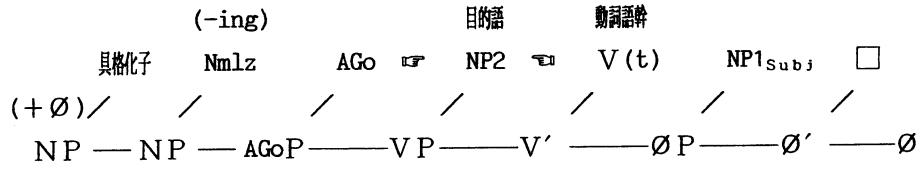


図２　英語　-ing の場合（進行形を構成する場合）



上述の２つの図で見るようにドイツ語ではＶＰの段階で名詞化子（日本語の「こと」のように抽象的なＮと考えてよい）が掛かってＮＰが形成されるので、意味的に目的語候補があっても対格をライセンスされることはないが、英語ではＶＰの上にθ役割を確認する抽象的形容詞AGo が掛かるので、動詞との挟み統率によって目的語候補はライセンスされた目的語になっている。AGoＰの段階になって名詞化されるから目的語は存続できるが、そうしてできたＮＰの上に更に「具格化子」という要素が掛かり、さらに抽象的叙述力の乗り物Ø述語の力もそこに及んで、このＮＰは述語として働く資格を身につける。なお助動詞 be は時制子に付加される、と考える。

以上のように考えると機械的にはかなり辻つまの合う、述語動名詞ができる過程や「進行形」を構成する過程の説明ができるのであるが、図２は単に英語の進行形だけでなく、前節で述べた、南欧ロマンス諸語の STARE＋-ando/-endo タイプの進行形をもうまく説明できそうである。いわゆるgerundioは結局のところ動名詞の具格形だからである。

ところで、述語／客辞になる名詞句はみな或る種の共通の格をもっている（それを今のところ一まとめに「具格」と表現したが）、とは言っても意味論的に混同されてはならない格の下位分類がある。それは「ＡはＢである」と言っても、現在を含む或る限られた時間だけ真であるような事態か、それとも時に関係なく通用するような事態か、の違いである。前者をＡ＝Ｂで表わすならば後者はＡ≡Ｂ（恒等式）で表わされよう。

Ｂが具象名詞の場合でも、たとえば「学生」であるとすると、学生はやがて卒業するだろうからtransient な身分であり、対照的に「誰某の長男」というような身分はconstantで一生変わらない。ロシア語では現在時制の同定文で Ja stud' ent. 【コピュラは省略される】「私は学生です」、に対して過去時制では Ja byl stud' entom. 「私は学生でした」のようにＢにあたる述語名詞を「造格」（具格）で表わす語法があるが、英語では時制によって格を変えるような文法はない。しかし次の点には要注意だ。

形はまったく変わらないのに英語の「進行形」には、進行中の状況を表わさず、「結局……するのと同じことになる」という意味を表わすことがある。たとえば「あの富くじを買ったの？ then, you are <u>losing your money.</u> 」などは恒等式的な意味である。

以上のように be＋Ｖ-ing の形式で表わされる見かけ上の「進行形」も一筋縄では分析できないが、構築文法の立場では、構築は分析と回文的（palindromic)に進行するのが望ましいので、上述の図２の上に、場合によって異なるいろんな抽象的形容詞(AG)を掛けて、そこで意味関係を構築／モニターすることが必要だ、と私は考える。ＡＧというのは「形容詞的担保」 'adjectival guarantee' の略語であって、すでに出てきた AGo（目的語のための…）、AGs（主語のための…）、AGz （前置詞の目的語＝斜格成分のための…）のように無音ながらそれらの意味論的資格をチェックする心の働きである。

英語の進行形の話が長くなりすぎたので、一応この問題から離れるが、英語に真の現在分詞があった時代にそれはどう使われたか、の話は最後の節に回そう。

５．日本語の進行態の場合（なぜ助動詞が「ある」でなく、「いる」なのか）

日本語の場合、一時的な進行中の状況を表わすのに「動詞連用形＋つつある」という言い方がある。たとえば「彼は走りつつある」であるが、この言い方はおそらく明治＝開国時代になって、欧米語とりわけ英語の進行形を訳すために人工的に作られた表現であって、１世紀以上たった現在に至っても、話し言葉としては充分なじまれていない。人工的創作であっても、便利であれば日本人はすぐ慣れて何でも使いこなす国民性をもっているが、この語法が真の口語にならないのは、二つの基本的な欠陥があるせいだ、と私は思う。その一つは、助動詞が「ある」であって否定形がうまく作れないことである。「有る」が本動詞であれば「あらない」という言い方はできず、単純な形容詞「無い」が否定形の代役を務めるのであるが、上記の「つつある」の場合は、たとえば「走りつつある」の否定形として「走りつつない」とは言えない。英語 he is not running. の翻訳手段として需要があるにも拘らず、である。

もう一つの、しかももっと根本的な欠陥は、助動詞が「いる」でなく「ある」であることそのことにある。以下述べるが、「いる」と「ある」の区別は主語が有生物か無生物かということによるのではない。「いる」は一時性、「ある」は恒常的状態を表わす、というのは或る程度当たっているが、「いる」は主語が無生物であっても可能性または選択肢として状態を選ぶことができる物の、まさに選ばれた状態を叙述するための助動詞として使われるのである。だから「この味噌は保存性がよく、長い間おいしくている／おいしいままでいる」のように無生物にも使えるのであって、それは「彼女は長いこと未婚でいる／長いこと未婚のままでいる」のような有生物の場合と基本的に同じである。

だから明治の人が英語の進行形を訳すのに「つついる」という形式を創作してそれを使うことに親しんでいれば、上記の he is not running. に対しても「彼は走りつついない」と言えるようになっただろう、と想像でき、少し残念である。

進行形のもう一つの表現は「…ている」というのであって、こちらはよく口語化しているが、これは完了態と区別が難しい場合がある。「私は今日は年賀状を書いている」というのは進行態だとほぼ判定できるが、「私はもう年賀状を書いている」というのは、既に年賀状を書いてしまったという意味なのか、まだ早いのに（たとえば１２月１０日に）早くも年賀状を書き始めているという意味なのか、曖昧である。「書き終わっている」とか「書き始めている」と言えば誤解は防げるが、正しい解釈のためには常識や状況判断が必要である。この曖昧さは西日本の多くの方言で語法によって回避されている。

西日本（たとえば神戸以西）では動詞「いる」を使わず、代わるのは５段活用の「おる」である。この「おる」を使う地域では、これからできた合成助動詞として「とる」（＜ておる）と「よる／ょーる」（＜動詞連用形＋おる）があり、前者が完了態に、後者が継続態に使われる。だから「書いとる」と言えば（100%ではないが大体）書き終わっているという意味になり、「書きよる／書きょーる」といえば現在筆記中の意味になる。なお、こ

の後者の表現には否定が可能であることも言い添えておきたい。「書きょーらん」と言えば英語の 'is not writing' に立派に対応するのである。

さらに日本語の同定文を見てみよう。同定の助動詞つまりコピュラは、「である」という書き言葉専用のものを除けば、東日本では大体「だ」であり、西日本でも鳥取県や兵庫県但馬地方は「だ」を使うが、関西では「や」、岡山県や広島県では「じゃ」が一般的であり、四国・九州では「や」「じゃ」が入り混じっている。関西弁の「や」は d- 成分が脱落して発音が軟かくなっているが、これらはすべて「である」、つまり起源的には「にてある」から変化したものである。この「にて」は「文語」の助詞であるが、おもに道具や手段や原材料を表わす「具格」か、それとも事態が生起／存在する場所をあらわす「所格」の標識として使われたものである。ということはすなわち、日本語の名詞述語文の叙述名詞（句）は【決してラテン語のように主語の主格に合わせて主格を帯びるのでなく】、具格／所格を帯びていることになる。だから「書いている」「書きよる／書きょーる」の中の「書いて」「書き」成分は動名詞の時間的な所格と見なしてよいであろう。

6．英語の歴史における「真の現在分詞」の使われ方について

今までの話から、英語の「進行形」に使われる-ing形のいわゆる「現在分詞」は真の分詞ではなく、動名詞の具格／（時間的）所格であることが明らかになったが、その証拠にはこんな動名詞に a- という接頭辞がついて使われることがある。現在では 'The house is being built.' に取って代わられてしまったが、'The house is a-building.' という言い方が以前はあり、この a- が弱化して脱落すると能動と受動の態の別が不明になって困るが、とにかくそういう言い方があった。この a- という接頭辞は前置詞 on や at が弱化して出来たもので、このことからも-ing形が動名詞であることがわかる。

しかし「真の現在分詞」は確かに古英語には存在し、-ende/-ande のような語尾をもっていた。ドイツ語の事情を参考にされたい。これがコピュラと組んだ語法はたしかに存在したが、Wilkinson[1980] によればそれは過去時制のみに現れたという。つまり「現在進行形」にではなく「過去進行形」に、たとえば 'wæs sprecende' 「話しよった」、 'wæs gangende「行きよった」（あえて西日本方言で訳した）のように使われたのである。なぜ過去時制のみに使われたか、を考察してみると、結局それはラテン語やロマンス諸語の半過去／未完了過去に当たる役割をしたことが明らかになる。過去のことを語る際に、事態が完結したのか、継続中だったのかを区別することは決定的に重要だからである。一方、現在進行中／継続中のことは単純現在で充分表現できたのである。

参考文献

☆Wilkinson, Hugh E. [1980](改訂新版)『英語史入門』　研究社　　東京
☆田原　薫　1997, 1999, 2003, 2004, 2005, 2007, 2008, 2009 の『ニダバ』寄稿諸論文
☆田原　薫　(2010)「句構造文法復活のために必要な概念整備」『ニダバ』第３９号